

つつむ・おおう

石井龍治

1. はじめに

この二語は、共に包摂を表す動詞である。「つつむ」については、服部1980で「くるむ」「くるめる」と比較分析がなされ、「おおう」についても、田村1980で「かぶせる」との比較分析が行なわれている。「つつむ」と「おおう」は文型も類似しており、実際の使用においても、同じ現象に対して、この二語が両方使える場合が多いのであるが、二語の意味には、上の二つの分析の場合に比べると、かなりの隔りがある。だから、ここで可能な意味分析には限界があり、あくまでも「つつむ」と「おおう」を比較することによって浮かび上がってくる二語の意義特徴の違いに基づく意味記述にとどまる、と言わねばなるまい。

この分析の後半のかなりのスペースをさいて、構文上の問題を扱う。実際の使用においては、意味と同様、ケース・マーキングもまた、なんらかの形で形式化されていなければならないと考えるからである。

2. 分析

2. 1. 意味

2. 1. 1. ヲ格名詞句の制約

「つつむ」のとするヲ格名詞句には、制約がある。次例を参照されたい。

- (1) a. *マンホールを つつむ。
b. マンホールを おおう。
- (2) a. *腹の傷口を 絆創膏で つつむ。
b. 腹の傷口を 絆創膏で おおう。
- (3) a. *花子が 口を 手で つつみながら 笑う。
b. 花子が 口を 手で おおいながら 笑う。
- (4) a. *ほらあなを つつむ。
b. ほらあなを おおう。
- (5) a. *窓を カーテンで つつむ。
b. 窓を カーテンで おおう。
- (6) a. *コントラストが 強過ぎるので 背景の部分を つつんで 写真を 焼く。
b. コントラストが 強過ぎるので 背景の部分を おおって 写真を 焼く。
- (7) a. *目を つつむ。
b. 目を おおう。
- (8) a. *雲が 空を つつむ。
b. 雲が 空を おおう。
- (9) a. *床の割れ目を つつむ。

- b. 床の割れ目を おおう。

(10) a. *地面を つつむ。

- b. 地面を おおう。

ヲ格名詞句が具体物である場合には、それが他の物と分離可能な、独立して存在するものでない限り、「つつむ」ことはできない。一方、「おおう」に関しては、このような制約はない。

2. 1. 2. 「手段」に関する制約

ここでは便宜上、「手段」という語を用いるが、誤解の無いように、以下の説明によって指定する名詞句を「手段」名詞句と呼ぶことにする。

構文については、あとで詳しく触れるが、一応、説明の必要上、ここに「つつむ」と「おおう」の文型を示しておく。

「つつむ」の文型

(ア) 文型 [N₁ガ N₂ヲ N₃ニ/デ つつむ]

(イ) 文型 [N₃ガ N₂ヲ つつむ]

「おおう」の文型

(ウ) 文型 [N₁ガ N₂ヲ N₃デ おおう]

(エ) 文型 [N₁ガ N₂ニ N₃ヲ おおう]

(オ) 文型 [N₃ガ N₂ヲ おおう]

[Nは名詞句を示す。番号は、パラフレイズが可能な場合があるので、それに基づいて統一した。]

ここでは、N₃を「手段」名詞句と呼ぶことにする。「手段」が、立体のまわりをとり囲むことのできるものでなければ、対象を「おおう」ことはできても「つつむ」ことはできない。次の例を参照されたい。

- (11) a. *一枚の木の板で ボールを つつむ。
b. 一枚の木の板で ボールを おおう。
- (12) a. *ペン皿で 消しゴムを つつむ。
b. ペン皿で 消しゴムを おおう。
- (13) a. *妹の花子が突然部屋にはいつてきたので 太郎は 夏子からの手紙を そばにあったLPレコードのジャケットで つつんだ。
b. 妹の花子が突然部屋にはいつてきたので 太郎は 夏子からの手紙を そばにあったLPレコードのジャケットで おおった。

2. 1. 3. 接触

「つつむ」動作には、「接触させる」という動作が含まれている。次例参照。

- (14) *病人が 病室で 白い壁に つつまれて 生活

している。

(15) *山で テントに つつまれて 寝る。

(16) *一本のマッチが マッチ箱に つつまれている。

(17) *洋服単筋の中の洋服は 木に つつまれている。

(15)において、この文を正しい文と見做すとすれば、それは、普通、寝袋が果すべき役割を、テントに負わせているという意味にしか取れない。テントを立てて、その中で寝るという意味にはならない。これに対して、「おおう」は必ずしも接触を必要としない。次例参照。

(18) マッチの火を 手で おおう。

(19) 野球場を ドームで おおう。

(20) 親鳥が ひなを 羽で おおう。

(18)において、「マッチの火」と「手」とが接触したとすれば、やけどをしてしまう。(19)の「野球場」と「ドーム」とは、一部接触してはいるが、その接触は言語の分析にとって問題になる性質のものではない。(20)においても、「ひな」と「羽」との接触の有無にかかわりなく、この表現が使える。したがって、「おおう」は接触の有無に関して中立であると言える。

2. 1. 4. 意味の共通性

「はじめに」のところで述べたように、また以上の分析によっても明らかなように、この二語の意味にはかなりの隔りがある。しかしながら、共通性が全くないというわけではない。今、 N_2 に対して動作が行なわれるその前後の状態に着目してみよう。動作の前には N_2 の一部または全部が露出している。動作の後には、その露出部分が無くなっている。この点に関しては、二語に共通性がある。

2. 2. 構文

2. 2. 1. 「つつむ」

文型については、2.1.2.で示してあるので、まずその具体例を示す。

(7) 文型 [N_1 ガ N_2 ヲ N_3 ニ/デ つつむ]

(21) 花子が 着替えを 風呂敷に つつむ。

(22) 太郎が 本を 新聞紙に つつむ。

(23) 花子が あんを 餅で つつむ。

(24) 太郎が 荷物を 包装紙で つつむ。

(1) 文型 [N_3 ガ N_2 ヲ つつむ]

(25) 母の愛が 太郎を つつむ。

(26) 夜霧が 二人を つつむ。

(7)文型において、 N_2 が具象物であれば、 N_3 をマークする格助詞は「ニ」でも「デ」でもかまわないようである。次例を参照されたい。

(27) a. 魚屋が サンマを 新聞紙に つつむ。

b. 魚屋が サンマを 新聞紙で つつむ。

(28) a. 花子が 太郎の死体を 白い布に つつむ。

b. 花子が 太郎の死体を 白い布で つつむ。

(29) a. 夏子が 大根を ラップフィルムに つつむ。

b. 夏子が 大根を ラップフィルムで つつむ。

これに対して、 N_2 が抽象物であれば、 N_3 をマークする格助詞は「ニ」に限られる。次例を参照されたい。

(30) a. 花子が 悲しい思いを 胸に つつむ。

b. *花子が 悲しい思いを 胸で つつむ。

(31) a. 太郎が 喜びを 胸に つつむ。

b. *太郎が 喜びを 胸で つつむ。

この場合、 N_3 にくる名詞は「胸」のみだと思われるので、「胸に つつむ」をイディオムとして処理した方がよいかもしれない。

2. 2. 2. 「おおう」

「おおう」について、同様に具体例を示す。

(7) 文型 [N_1 ガ N_2 ヲ N_3 デ おおう]

(32) 花子が 太郎の顔を ハンカチで おおう。

(33) 大工が 屋根を トタンで おおう。

(7) 文型 [N_1 ガ N_2 ニ N_3 ヲ おおう]

(34) 給食当番の人が 頭に 三角巾を おおう。

(35) 百姓が 苗床に ビニールを おおう。

(7) 文型 [N_3 ガ N_2 ヲ おおう]

(36) 雪が 山を おおう。

(37) 厚い雲が 空を おおう。

この中で、(7)文型はあまり一般的ではなさそうである。次の例を参照されたい。

(38) a. 花子が 自分の顔を 手で おおう。

b. ?花子が 自分の顔に 手を おおう。

(39) a. 太郎が 自動車をカバーで おおう。

b. ?太郎が 自動車に カバーを おおう。

(40) a. 犬が 骨を 土で おおう。

b. ?犬が 骨に 土を おおう。

(41) a. 太郎が マッチの火を 手で おおう。

b. ?太郎が マッチの火に 手を おおう。

(42) a. 飼育係りの男が 暴れる猿を ネットで おおう。

b. ?飼育係りの男が 暴れる猿に ネットを おおう。

(43) a. 国民学校の児童たちが 頭を 防空頭巾で おおう。

b. 国民学校の児童たちが 頭に 防空頭巾を おおう。

- (44) a. ゴルフ練習場全体を 巨大なネットで おおおう。
 b. ゴルフ練習場全体に 巨大なネットを おおおう。
 b文の判定に関しては、個人差がある。

2. 2. 3. 格助詞

(ア)文型において、N₃をマークする格助詞は「ニ」と「デ」の二つがある。先の「胸に つつむ」をイディオムとすれば、「ニ」と「デ」は、全く自由に交替させてもよさそうであった。しかしやはり、この両者の間には微妙な違いがあるようである。次の例を参照されたい。

- (45) a. ?太郎が 自動車を カバーに つつむ。
 b. 太郎が 自動車を カバーで つつむ。
 (46) a. ?次郎が 引伸機を ビニールカバーに つつむ。
 b. 次郎が 引伸機を ビニールカバーで つつむ。
 (47) a. ?引越のとき 三郎が 冷蔵庫を いらなくなった古いカーテンに つつむ。
 b. 引越のとき 三郎が 冷蔵庫を いらなくなった古いカーテンで つつむ。
 (48) a. ?三郎が アンプを 毛布に つつむ。
 b. 三郎が アンプを 毛布で つつむ。
 (49) a. ?三郎が 14型テレビを 大きなバスタオルに つつむ。
 b. 三郎が 14型テレビを 大きなバスタオルで つつむ。

(45)~(49)のb文は自然であるが、「デ」を「ニ」にしたa文は少し不自然である。先の(27)(28)(29)は、N₃を「ニ」でマークしても「デ」でマークしてもよかった。これは、どこに違いがあるのだろうか。今、(27)(28)(29)のN₂と(45)~(49)のN₂とに注目してみよう。

(27)(28)(29)のN₂——サンマ, 太郎の死体, 大根

(45)~(49)のN₂——自動車, 引伸機, 冷蔵庫, アンプ, 14型テレビ

まず言えることは、(27)(28)(29)のN₂は、N₁にとって自由に動かすことの可能なものであるのに対し、(45)~(49)のN₂は、N₁にとって自由に動かすこと、つまり、横にしたり、転がしたりすることのできないものである、ということである。この点に着目してみると、上の問題に関しては、以下のように考えればよいのではないと思われる。

{N₁ガ N₂ヲ N₃ニ つつむ}という表現をした

場合には、基本的には「N₃が広げられているその上へ、N₁がN₂を載せて、それから「つつむ」という動作を行なう」ということを意味する。したがってN₂がN₁にとってたやすく動かすことのできないもので、N₂のところへN₁がN₃を持ってきて接触させるという動作しかありえない場合には、{N₁ガ N₂ヲ N₃ニ つつむ}という表現をすると不自然になる。{N₃デ}という表現は、このこととは無関係に使える。

2. 3. 慣用的な表現

2. 3. 1 「つつむ」の慣用的な用例

- (50) 謝礼に 千円 つつむ。
 (51) つつみきれないうれしさを 感じる。
 (52) なんでも つつまず 言うがよい。
 (50)の「つつむ」は、デ格名詞句を取らず、ヲ格名詞句には、金銭ないしそれに類するものがくる。意味は、[謝意または慶意や弔意を示すためのお金などを渡すために、それをのし紙などにくるむ]である。(51)(52)の「つつむ」は、「かくす」とほぼ同じ意味で、(50)同様、デ格を取らない。

2. 3. 2. 「おおう」の慣用的な用例

- (53) 非を おおう。
 (54) 罪を おおう。
 (55) 真相を おおう。
 (56) それは おおうべからざる事実だ。
 これらは総て、デ格を取らず、意味は、[かくす]であるが、(51)(52)の「つつむ」と違う点は、ヲ格名詞句に必ず「よくないこと」がくるという点である。次例参照。

- (57) *喜びを おおう。
 (58) *幸福を おおう。

3. まとめ

以上の分析のうち、慣用語以外の部分について、以下にまとめておく。

●つつむ / {N₁ガ N₂ヲ N₃ニ / デ_____}

「N₁がN₃をN₂のまわり全体に接触させて、N₂の露出部分を無くすこと」N₂がN₁にとってたやすく動かすことのできないものである場合にのみ、N₃を「ニ」でマークしてもよい。

／{N₃ガ N₂ヲ_____}

「N₃がN₂のまわり全体に接触して、N₂の露出部分を無くすこと」

(N₂; 他物と分離可能な独立して存在するもの。N₃; 立体のまわりをとり囲むことのできるもの。)

● おおう / [N₁ガ N₂ヲ N₃デ_____]

「N₁がN₃を使って、N₂の露出部分を無くすこと」

／ [N₁ガ N₂ニ N₃ヲ_____]

「認識上の意味は上に同じ」(この文型は、一般的ではない)

／ [N₃ガ N₂ヲ _____]

「N₃がN₂の露出部分を無くすこと」

以上のようにまとめてみたが、「露出部分」という概念を規定しておく必要があると思うので、最後に付け加えておく。上の記述において「露出部分」とは、外部から見えている部分、あるいは外部からなんらかの影響を受けている部分という意味である。

言語経歴：1959年7月愛媛県八幡浜市生。0歳～4歳八幡浜市。4歳～18歳松山市。18歳～東京都目黒区。
(東京都立大学学生)

まわる・めぐる

川 嶋 秀 之

1. はじめに

「まわる」と「めぐる」は移動をあらわす用法として、次のように用いられることがある。

- (1) 昭和十二年頃、四国に遊びにいった時に、春休みだったが、室戸岬で若い巡礼姿の女性と道連れになった。この秋には結婚するのだが、まだ札所を廻り終わっていないので、今巡っているのだということだった。(池田弥三郎『おとこ・おんなの民俗誌』講談社文庫 1974 P. 168)

この例では「廻り」を「まわり」、「巡り」を「めぐり」と読ませて区別しているが、これを入れかえて「巡り終わっていないので、今廻っているのだ」としても、あまり違和感を感じない。ほぼ同じ意味のようであるが、この二つの動詞に意味の違いはないだろうか。

2. 分析

2.1. まわる

最初に「まわる」から検討してみよう。

- (2) コマ(独楽)がまわる。
(3) 風車がまわる。
(4) モーターがまわる。

これらはいずれも軸がそれぞれのものの真中にある、その中心軸が回転するものである。中心軸の回転にともない、(2)(3)のように中心軸に付随したまわりの部分がいっしょに回転するものもあれば、(4)のように固定されていて回転しないものもある。これらは物についてであるが、人についても用いられる。

- (5) バレリーナが片足でまわる。

これは、バレリーナが片足を中心軸にして回転運動をすることである。以上の諸例には「めぐる」は、現在、使われないようだ。「まわる」「めぐる」に対応する他動詞、「まわす」「めぐらす」でも、それは同様である。

- (6) 日傘を くるくる まわす。
(7) *日傘を くるくる めぐらす。

以上から「まわる」の特徴として、中心軸を持って回転運動をする、ということが言えよう。

次のような例もある。

- (8) 北極星を中心に 星がまわる。
(9) みずすましがまわっている。
(10) とんびが 輪をかいてまわる。

(8)はシャッターを開け放して撮った写真を思い浮かべていただきたい。中心にある北極星は動かず、そのまわりを他の星が円運動の軌跡を描くのである。(9)(10)の例は、中心軸または中心となるものが存在しない場合で、これらの例では中心軸が回転しなくても、また、中心が存在しなくても、要するに、移動したあとの軌跡が円形であれば「まわる」が使われることを示している。

また、

- (11) 運動場をまわる。
(12) 早朝マラソンで 町内をまわる。
(13) 山の手線を 電車がまわる。

の例では、(11)は普通楕円形であり、(12)(13)は厳密な意味でなくても、円形をなしているとは言いがたい。「まわる」は、その軌跡が円形でなくても使えるようだ。